

友松鼎談 ①7

【平成 27 年 7 月記録】



小川信夫さん



相吉 靖さん

今年の 4 月 22 日、同期生で川崎在住の相吉 靖さんに誘われて、銀座の交詢社で行われた小川信夫さんの講演を聞きに行きました。実におもしろい講演で、友松会の先輩にもこういう型破りの才能を持つ人が居たのかと驚きました。

小川さんは昭和 23 年に神奈川師範卒の先輩で、川崎市に在職され教職員課長、学校教育部長、川崎市総合教育センターの初代所長などの要職を歴任されました。現職中から公務の傍ら演劇に情熱を注ぎ、退職後は日本児童青少年演劇協会理事を勤められ、川崎郷土市民劇の脚本作家としても活動されています。

今年の 5 月には市民劇の第 5 作目として、川崎出身の詩人佐藤惣之助を描いた「華やかな散歩」が川崎市内の会場で公演されました。

銀座でお話を伺った直後にお目にかかったのですが、年齢を感じさせないエネルギーな方で、戦中から戦後にかけての体験も実に波乱に富み、ぜひお話を伺いたいとお願いして実現したのがこの対談な

らぬ鼎談（ていだん）です。敢えて「鼎談」としたのは私の同期生で川崎に勤務し、小川信夫先輩を良く知る相吉 靖さんにも話し合いに参加して貰ったからです。以下がその時の話し合いの記録です。

波乱の時代に生きて 教育と演劇に捧げた人生

語り手	小川 信 夫（昭和 23 年 神師卒）
語り手 & 聞き手	相 吉 靖（昭和 35 年 国大卒）
聞き手	黒 川 鈴 谷（昭和 35 年 国大卒）

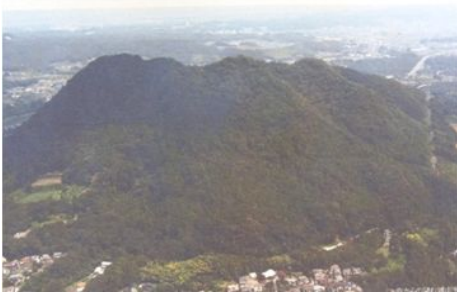


黒 川 4 月に伺った先生の講演の中で、故郷津久井のことや県立厚木中学のお話がとてもおもしろかったのですが、今日そこからお話を聞かせて頂くとかなり長くなります。この記録は友松会のホームページに載せるものなので、それを考えると、神奈川師範に入学した辺りから語って頂いても良いのではと考えました。そこでそこから話を始めさせていただきます。

その前にまず順序として、先生がお生まれになった時代と場所を伺いたいのですが。

小 川 私が生まれたのは、大正 15 年の 10 月です。あと 2 カ月ほどで昭和になるので、大正時代の一番最後の生まれと言ってよいでしょう。

黒川 お生まれになった場所は、当時の津久井郡ですか。



上空から見た城山公園

小川 そうです。城山の麓にある串川村と言うところ
です。横浜線の橋本から津久井に入るバスがあ
り、川尻村を通過して中野町、その隣が串川村で
す。その先には鳥屋村、青野原村、青根村など
があり、私の家は今の根小屋小のそばにありま
した。

黒川 いま話に出て来た村や町は、今ではみんな相模
原市緑区に吸収されて無くなってしまいました
ね。これは良いことなのでしょうか。

小川 決して良いことではありません。故郷の村や町が消えてしまうと
言うのは、その村や町で育てられ伝えられてきた文化を失うということな
のです。津久井郡に生まれ育った私達は、故郷の伝統と文化を失って
しまったのです。ちょうどパレスティナの人のようにね。

黒川 そうですね。一頃は全国で流行のように町村合併がありました。確かに行政の効
率と言うことだけを考えれば、自治体が大きくなった方がよいでしょう。でも効
率を手に入れた代償として、より大切なことを失った気がします。

ところで先生は昭和 14 年に県立厚木中学に進学され、昭和 18 年中学 4 年の時
に、甲飛(甲種飛行予科練習生)に入隊されたのですね。そして敗戦となって特攻
出撃をまぬかれ、故郷の津久井郡の村に復員されたのでしたね。

小川 そうです。無事に帰って家に着いた時に、母が私を抱きしめて喜んでくれたこと
は忘れられません。家に帰りついて思ったことは、これからは宮沢賢治の「雨ニ
モ負ケズ」のような生活をしようということでした。

黒川 それはつまり、どういうことですか。

小川 厚木中学時代の先生に、宮沢賢治の詩「雨にも
負けず」を教わりました。とても心を打たれて、
その詩が印刷された紙を私は軍隊にまで持って
行きました。戦いに敗れた時に心に浮かんだの
はこの詩でした。そこで私は「よし、故郷に帰
って小さな畑を耕し、この詩のように生きよう
と思いました。



小川家の両親と子供たち、右から三人目
が小川信夫さん(当時 4 年生)

黒川 それは素晴らしい考えですが、その通りに出来
たのですか。

小川 いや、津久井の故郷の家に帰ってみると、戦争を避けて疎開してきた親戚の大人
や子供がたくさんいて、とても晴耕雨読の境地にはなれないのです。

相吉 昔はどの家にも子供達がたくさんいましたからね。それでどうしたのですか。

小川 そんな時に予科練の戦友が、耳よりのことを教えてくれました。その年(昭和 20
年)の九月末に文部特例法という法令が出て、それによると海軍の学習過程を修了
している者は大学・高専の編入試験を受けることが出来るというのです。しかし
当時は東京・横浜をはじめ都会はどこも焼け野原で、学校に通うどころか住むこ

とも大変な時代でした。

仕方なく津久井の家で暮らしていたのですが、父方の親戚の大塚家の法事に行ったとき、そこで鎌倉で小児科の医者をしている従姉に会ったのです。「あ、信ちゃん生きて帰って来たの。今なにをしているの。」というような会話から、復員以来の状況を話しました。そしたら、「それなら私の家に来れば良い。息子の孟司の勉強を見てくれれば、下宿代などいらぬよ。」というのです。

相 吉 「息子の孟司」と言うのは、後年『バカの壁』などの著書で知られる養老孟司さんですね。小児科の養老医院は、鎌倉駅前の島森書店の裏手にありました。

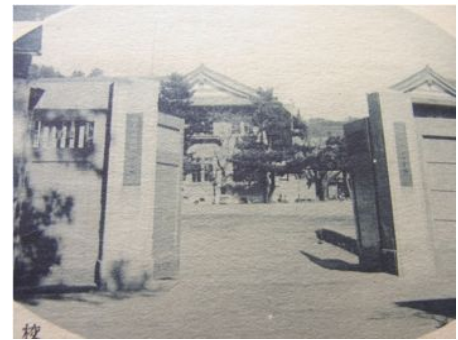
小 川 そこで私は養老医院に寄宿することにして、近くにある神奈川師範に入学の手続きをしました。

黒 川 鎌倉は戦災を受けませんでしたからね。その頃の師範の様子はどんなふうだったのですか。ちゃんと授業が行われていたのですか。

小 川 もちろん講義は行われていました。私もちゃんと出席して講義を聞きましたよ。でもこの頃、私に最も影響を与えたのは、学校以外での勉強でした。

黒 川 と言うと、それはどんなことだったのですか。

小 川 養老医院は小児科医で、患者の家は鎌倉でも上流の家庭が多かったのです。それらの家庭の子供達を私の従姉の女医さんが昔から面倒を見ていたのです。その子達が成長して東大・早稲田・慶応などの学生になっていました。その学生たちが学校の帰りに夕方から養老医院に集まるのです。



神奈川師範学校 正門

黒 川 何か目的があったのですか。

小 川 あったのです。養老の家には孟司君の兄と姉とがいました。その姉が東京女子大の学生で美人だったのです。つまりその才媛の女子大生を目当てに集まってくるのです。もっともその頃の学生ですから、そんな気持ちをストレートには出しません。そんな気持ちは内側にしまっておいて、お互い同士でかんかんがくがくの議論をするのです。コーヒーを飲みながらね。

黒 川 えっ、敗戦直後でしょう。コーヒーなんかあったのですか。

小 川 養老の家にはコーヒーでもチョコレートでも、なんでもありましたよ。なにしろ裕福な患家を抱えている流行の医者ですからね。

話を元に戻すと、その学生たちの話にニーチェとかゲーテとかいう名前が出てくる。ドストエフスキーとかトルストイとかの作品について論じ合う。ところが私にはさっぱり分からないのです。私など文学作品と言えはせいぜい国語の時間に習った夏目漱石の作品くらいしか知りません。戦争中に生死の境をくぐりぬけるような体験をし、自分では少しはましな人間になったと思っていたのですが、少なくとも知識の面では同じ年頃のこの学生達にかなわない。私はものすごいコンプレックスを感じ、勉強しなければいけないと心から思いました。

黒 川 その気持ちはとても良く分かります。学生の頃は、友人がどんな本を読んでいるか、どんな本を持っているかとても気にしましたね。

小 川 当時の文系の勉強法は「本を読む」ということなので、師範での二年間はがむしやりに本を読みました。幸い養老の家にも本があったし、自分でも買ってきました。でも当時は敗戦直後の社会で今のように各地に図書館が有る訳でもなく、本の出版も盛んではありませんでした。何処へ行ったらもっと自由に読みたい本が読めるだろうかと悩みました。ところが天の助けと思う様な事が起こったのです。それは酒井敬一さんと言う人に出会ったことでした。

相 吉 ああ、神奈川県音楽堂の初代の館長や、金沢文庫の文庫長をなさった方ですか。



鎌倉にあった神奈川県師範本館

小 川 そうです。この人は最初は大蔵省に勤めていて、三島由紀夫と一緒にいたそうです。三島と仲が良く三島が作家になるために大蔵省を退職したときに一緒に文学をやろうと辞めたのですが、この人は翻訳の方にいきました。

酒井さんは東大の法学部なのでドイツ語は堪能です。たまたま原本が手元にあったヴァン・デ・ベルデの「完全なる結婚」を翻訳して出版したと

ころ、これが大ベストセラーになったのです。

黒 川 ああ、その本の名前は若い頃に聞いたことがあります。読んだことはありませんが。

小 川 その酒井さんのお子さんが養老医院の患者で、あるとき一生懸命本を読んでいる私を見て「小川君、うちへいらっしやい。あんたの好きな本がいっぱいあるよ。」と声をかけてくれました。酒井さんの家は、今の大塔宮のあたりにあった大きな家でした。次の往診に先生のカバン持ちで酒井さんの家に行った時に、二階に上がらして貰って吃驚しました。二階の部屋中に本が溢れていました。あんなにたくさん本を持っている人を見たことが有りませんでした。

黒 川 そういう人に出会うと言うのも、小川先生が持って生まれた運の良さなのでしょうね。

小 川 この酒井さんは文学好きで特に演劇の造詣が深い人でした。酒井さんの家の二階にはフランスの戯曲、ドイツの戯曲をはじめ世界中の戯曲が全部あるのです。そこで酒井さんの指示に従ってこれらのものを読み始めました。例えばイプセンの作品を読み終わると、酒井さんが炬燵でイプセンについて講義をしてくれます。

なにしろベストセラー作家で経済的にゆとりがあり暇もありますから。この講義が二時間でも三時間でも続くので、その造詣の深さには驚きました。「これは私一人で聞いたのではもったいない」と思ったので、師範の仲間呼びかけ演劇部を作り、その演劇部の仲間を連れて酒井さんの所に行き、戯曲を読んでは講義を聞いて勉強しました。つまりゼミナールですね。これを二年間くらいやりました。



当時の鎌倉駅

黒 川 それは素晴らしい勉強の機会でしたね。先生が学校劇や川崎市民劇に関わってお

られるのは、その動機にどんなことが有ったのだろうと思っていましたが、そういう経験があったのですね。

小川 酒井敬一さんに巡り合ったことで、私の演劇への目が開かれたのです。この酒井ゼミで古典を徹底的に読んだことが、強みになりました。私の演劇の原点はこの酒井ゼミナールなのです。一方でこの勉強を下地にして、師範学校の演劇部で実際の演劇活動をやりました。日本の古典や洋物もやって卒業まで二年間、演劇活動をしたのです。

酒井さんの指導で、テアトロバッカスという劇団を作って神奈川県の山北などの農村地帯を、夏休みになると巡回公演もしました。

相吉 先生は師範在学中に、演劇だけでなく新聞部も作って活動されたそうですね。

小川 朝日新聞の社会部副部長の家が鎌倉にあって、その子供を家庭教師で教えていました。その家にはよく行っていたので、そこで朝日の記者とも知り合い一緒に酒を飲んで語り合ったりしました。それで新聞にも興味を感じて師範に新聞部を作り新聞を発行しました。当時はまだ戦後の物が乏しい時代で、新聞用紙も配給制だったので神奈川新聞に行き、「神奈川師範新聞部」の新聞用紙を1連とか2連とか決まった量を配給して貰うのです。印刷は神奈川新聞の印刷工場で行ってもらいました。

黒川 さて昭和23年春に、いよいよ師範を卒業することになるのですが、卒業と同時にスナリ教育界に入ると言う訳に行かなかったのですね。

小川 いや私としては教育界に進むつもりで、勤務先も横浜の中学校にきまっていました。ところが卒業式の10日程前に担任の野村先生から「明日、校長室へ行くように」と言われました。「何ですか」と聞いたのですが、野村先生も「自分もどんな用件か知らない」とのことでした。私は新聞部をやっていたので、何かそちらの方の取材かなと思ったのです。ところが翌日校長室に行くと、もう一人呼ばれた者がいて、校長室のテーブルの上には天井が三つ載っていました。



甲種予科練時代の小川さん

黒川 昭和23年のことでしょう。当時私の家の普通の食事は進駐軍放出のトウモロコシの粉のダンゴ汁ですからね。天井なんてすごい御馳走ですね。

小川 校長先生が、「昼時なので食べて下さい。食事のあとで話をしましょう」と言われるので、「いったい何だろう」と思いながら食べました。食べ終わると校長先生から話がありました。「君たちは戦争中に日本の為に命がけで働いてくれた。その君たちにこんなことを言わねばならないのは実に残念だが、君たちは教職に就けないことになった。GHQ(連合軍総司令部)からの指令で、戦争中軍隊に籍の有った者は教職に就けないことになった。実に残念である。」とのことでした。そう言えば呼びだされたもう一人も甲飛の経験者でした。

相吉 しかし先生は陸士や海兵出のいわゆる職業軍人だったわけではないのでしょうか。

小川 いや、甲飛は志願兵ですから、一般の徴兵で集められた者とは違う、職業軍人だ

ということなのです。

黒川 いや、とんだ災難ですね。それで先生はどうされたのですか。

小川 そういふことか。教職が駄目なら仕方ないと思いました。演劇活動をやっていたのでそっちの方にでも進もうかと思ったのです。実は、朝日新聞の社会部次長さんの家に家庭教師に行っていたのですが、そこで教職が駄目だったことを話すと、「それなら朝日の仕事をしたら」と言ってくれたのです。

相吉 でも天下の朝日新聞ですからね。そんなに簡単に入れたのですか。

小川 もちろん正式な社員ではなく、しばらくは雇員つまり臨時雇いということでした。1年か2年もすれば、内部試験で正式な採用にするということなのです。

黒川 しかし先生は後に川崎で教職に就かれたのですから、ずっと朝日に居た訳ではないのでしょうか。

小川 朝日ではひと月ほど東京にいて、それから大阪本社の大津支局にいき、3カ月ほどいてから、鹿児島支局に赴任しました。鹿児島は海軍時代にいたことがあるので懐かしかったです。ここには二年半ほどいましたが、海外にいた特派員が敗戦でどんどん戻ってきて記者は余ってるようだし、いつまで居ても内部試験で正式採用にはならないので、辞表を出して帰って来てしまいました。

相吉 こちらに戻ってきたのは何年頃ですか。

小川 昭和25年の初め頃です。失業状態でこちらに戻ってきたのですが、世話してくれる人が有って新潮社の「銀河」という雑誌の編集部に入れました。良かったと思ったのですが、この雑誌は二カ月で潰れてしまい失業者に戻ってしまいました。仕方がないので、今度は自分で探してある出版社に勤めました。

相吉 一つが駄目になってすぐ、次の勤め先が見つかるとは運が良かったですね。それはどんな本をだす会社だったのですか。

小川 辞典をつくっている会社ですが、人手が足りないせいかしばしば残業がある。これには困りました。何故かと言うとその頃私は経済を学ぼうと日大の経済学部の二部に入学したのです。残業があまり頻繁だと夜間に日大に通学出来ないのです。困ったなあと思っていました。その時に師範時代にお世話になった野村正七先生と新橋駅でバッタリ出会ったのです。

黒川 お話を伺っていて思うのですが、小川先生は人生の節目節目でその後の一生を変える人に出会っていますね。今度は野村先生が何と言われたのですか。

小川 野村先生が「君は今何をしているのだ」と聞くので現状を話すと、「それなら何で教職に就かないのだ」と聞かれました。「公職追放令が有るので、教職には就けません」と答えると野村先生は、「何だ知らないのか。そんなものはとっくに解除されている」とのことでした。私が驚いていると、「川崎の教育委員会に知人がいるから、紹介状を書いて上げよう」と言われました。



黒川 それは良かったですね。

小川 でも私は、「えーっ、川崎か」と思いました。当時の私の川崎のイメージは、工場と煙と3分間、いや1分間で通過、と言うものだったのです。

相吉 何ですか、その「3分とか1分で通過」と言うのは。

小 川 昔は横須賀線も湘南電車も川崎駅には停車しなかったのです。停車しないで短い時間で通過するだけ、そういう意味です。私もその頃は川崎のことは全然知らなかったからね。あまり気は進まなかったが、紹介状を貰ったからにはと思い、川崎市の教育委員会に行きました。

相 吉 その頃、川崎の市教委は何処にありましたか。

小 川 たしか保健所の近くにあったビルです。そのビルの二階に市教委がありました。野村先生の紹介状を出すと、出て来た人が「ああ、野村先生から聞いてますよ」と言いました。後から思うとその人は坂東さんでした。

相 吉 ああ、坂東先生ですか。

小 川 それで坂東さんが原稿用紙を 3~4 枚くれて、「君が考えるこれからの教育について書いて下さい。近くに喫茶店があるのでそこで書いて、1 時間くらいしたら持ってきて下さい。」と言うことでした。

黒 川 それが採用試験なのですね。昔は全て牧歌的でゆとりがありましたね。

小 川 そこで私はコーヒーを飲みながら書きました。これからの教育について、かっこう良いことはいくらでも書けますから、1 時間くらいで書き上げて持って行きました。隣の部屋で 1 時間くらい待っていたら、坂東さんと一緒に千葉教育長が出てきて「分かりました。君を採用します。」と言いました。

黒 川 それから小川先生と川崎の教育界との繋がりが始まったのですね。4 月の交詢社での講演で伺ったところでは、その後すぐに川崎市の教育研究所に赴任されたとのこと。しかし現場の経験が全くない人をいきなり教育研究所、つまり教育について研究するポストに就けるのは、ちょっと乱暴な人事と言う気がして不思議なのですが。

小 川 貴方の疑問は尤もです。私が研究所に赴任させられた理由は、一つには時期の問題があります。野村先生の紹介状を持って私が川崎市教委を訪ねたのは、たしか 4 月の 15 日頃でした。つまり新学期の現場の人員配置はすっかり終わっているのです。だからその時点で私が現場に行く余地はないのです。もう一つは着任して分かったのですが研究所での私の仕事は「研究」ではなく「事務処理」だったのです。

相 吉 研究所での事務処理というと、どんなことをされたのですか。

小 川 当時は川崎の小学校教員の四割は、女学校卒の学歴で無免許のいわば仮免の教師でした。以前の言葉で言えば代用教員ですね。どうしてこんな現象が生まれたかと言うと戦時中に男子教員が次々に兵役に就かされ、その穴を埋めるために女子の代用教員が増えたこと、戦後は男子教員の兵役従事者は帰ってきたが、六三制の実施に伴って義務教育教員の大量需要が生じたことなどの理由によるものです。ところが GHQ の指令によって、昭和 25 年までに 2 級免許状を取得しない者は解雇する、となったのです。



7 区に色分けした川崎 全図

そこで市教委としては急きょ講習会を開いて仮免の職員に免許を取得させることにしたのです。私が命じられたのは、その講習会の世話係でした。

黒川 世話係というと、具体的にはどんな仕事をなさったのですか。

小川 講習会は毎週水曜と土曜の午後に、高津中学を会場にして開かれました。なぜ高津中が会場になったかと言うと、この学校には市内で唯一戦災を免れた講堂があったからなのです。

研究所の福田所長からの指示では、講習会のカリキュラムが出来ておりその下に講師の名前が書いてあるので、講師の都合を聞いて講習会のプログラムをつくるように、と言うことでした。

黒川 講師はどんな方々でしたか。

小川 教育大、東大、横浜国大などの先生方です。講習会のプログラムが出来た段階でこれらの先生方の所に挨拶に行くのです。

相吉 けっこう大変な仕事ですね。でも講習会の当日も仕事があるのでしょうか。

小川 受講者の名簿を作り、当日は受講者名簿の自分の所に出席印を押させます。受講者が帰る時にレポート用紙を渡し、だいたい二週間後くらい後に研究所にレポートを提出させます。それをきちんと綴じ込んで講師の先生の所に届けるのです。教授はそのレポートを読んで受講者一人一人の成績をつけます。A,B,C,D と各人の成績が書いてある。A~C が合格で、D は不可です。その評定を個人の名簿に入れ、当人に通知するとともに県に提出すると、県がその単位の認定証をくれるという仕組みでした。

黒川 聞いただけでも大変で、現場の教員の方がずっと良いと思いますが。



講習会場となった高津中学(現在の校舎)

小川 しかし、これだけのことを私一人でやるのではなく、もうひとり事務員をつけてくれましたから平気でした。それより講習会での教育学や心理学の講義の間、私もその会場にいなければなりません。でも師範学校で一応聞いたことを又聞いても面白くないので、一番後ろに座って小説を読んでいました。

相吉 それはなかなかうまいことを考えましたね。

小川 ところが好事魔多し、とんでもないことになったのです。

相吉 どんなことが起こったのですか。

小川 二カ月ほどたって教育長に呼ばれこういう話がありました。「先日、講習会の講師の会合があったが、そこでの話で受講者のレポートは講師へ提出する前にあらかじめ君が読んで A~D の評定を鉛筆で書き、誤字・脱字も全部チェックしておいて貰いたいとのことだ。」というのです。さあ大変、一番後ろで小説を読むどころではなくなりました。

黒川 講師の先生方はきっと面倒になったのでしょうかね。

小川 まあそうなのでしょうがレポートに評定を付けるために、それからは講義が始まったらちゃんと聞いてノートを取らねばなりませんでした。学生時代にもこんな

に真剣に勉強したことはなかったくらいがんばりました。

そのうちに、講義の前にその内容を勉強しておけばもっと良く分かることに気が付きました。講義の題目はあらかじめ決まっているので、事前に本を読んで勉強しました。どんな本を読んだらよいかは、研究所の先輩が教えてくれました。事前に予習して講義を聞くと実に良く分かるのです。ただ弱ったのは講義の前に予習をし、講義のあとにレポートを読むから暇が全然なくて大変でした。しかし私が教育学・心理学・学校経営など教育の勉強を真剣にしたのは、この教育研究所時代なのです。

黒川 なるほど、野村先生に再会したのが4月になってからだったため現場ではなく研究所に行かされた。でもそれをプラスに転化したのは、先生の物事に取り組む姿勢ですね。

小川 私はその年の10月に、たまたま学級担任に欠員が出来た上丸子小学校に移り、昭和29年に川崎市から教育大へ内地留学に派遣されました。ところが研究所時代の講習会の仕事で、教育大の先生方とは顔なじみなのです。倉沢栄吉先生や石井庄司先生は良く知っていました。内地留学時代、石井庄司先生には特に気に入られて、石井先生が地方の小学校に指導に行かれる時には、「君、一緒に来ないか」と誘われてよくお供しました。その時に現場の先生の授業を見て、石井先生の話も聞き、指導主事みたいな勉強も出来ました。

黒川 ところで小川先生が無事に教育の世界に入られたのは良かったと思うのですが、学生時代に情熱を傾けた演劇との関わりは、その後どうなったのですか。

小川 それなんですね。教育界に入って仕事に生きがいを感じつつも、演劇の世界のことはやはり忘れることが出来ませんでした。ところが学校教育の中に「学校行事」という領域がありその中に「学芸会」などもあるのです。



学校劇の練習風景(昭和25年-1950年頃)

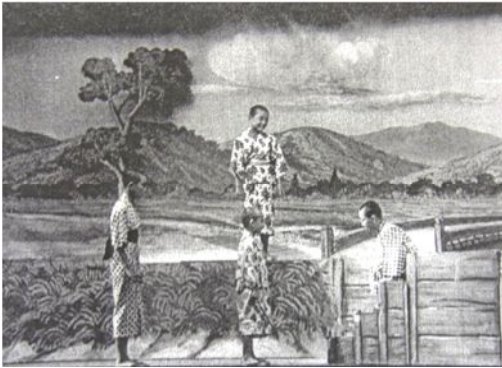
上丸子小学校時代に学芸会の大会があり、上丸子から出演する学級のために、私は「靴みがき」という菊田一夫を真似た脚本を書きました。そしたらその大会の講師として来て

いた斎田 喬、内山嘉吉の両先生が私の書いた脚本を見て「君の書いたものはおもしろい。センスがあるよ。うちのゼミナールに来て、本格的に勉強しないか。」と誘われました。そこで月2回、祖師ヶ谷のゼミに通ったのですが、そこには筒井圭介など児童文学の有名な作家も来ていました。

相吉 この辺りにも、小川先生の運の強さと言うか廻り合わせの良さというか、つまり好運が感じられますね。もちろん運を引き寄せるだけの先生の努力もあるのでしょうか。

小川 祖師ヶ谷ゼミに入って間もなくの昭和27年、私は創作劇『霧』で劇作家協会賞を受けました。その発表を夕刊で見た電通の放送部長からの依頼で、電通が作った劇団の「三越子ども劇場」第1回公演の為の脚本を書きました。私はそれまで長編の舞台劇を書いたことは無かったのですが、ここで学生時代に舞台を実際にや

っていたのがモノをいいました。その後は毎年この劇団の為に舞台劇を書きました。下村湖人原作の『次郎物語』や、宮沢賢治原作の『雨ニモ負ケズ』などです。



下村湖人原作・小川信夫脚色『次郎物語』
劇団キューピット公演、三越劇場(1956年)

黒川 一方で教育の仕事をやりながら、一方で劇作の仕事をするのは大変だったでしょうね。

小川 昭和29年からは民放が始まり、30年からはテレビが始まりました。この時、最初のテレビドラマを、それもゴールデンタイムのものを書かされました。最初はみんな訳も分からず、映画をイメージしながら書きました。まさに自由な時代でした。あの時、学校を辞めて本気になってやっていたら、テレビ作家になっていたかもしれません。

相吉 そういう道に進もうというお気持ちは無かったのですか。

小川 それは思いました。いくら忙しくても原稿を昼間の職場で書く訳にはいきません。土曜日の午後とか日曜日、或いは平日に家に帰ってから取り組むという毎日が続きました。その時、教育の仕事を辞めて、作家を本業にしようかなと何回も思いました。

黒川 しかし結局そうしなかったのは、何故なのですか。

小川 私はいろいろな専門作家を見てきました。例えば後に有名になった作詞家・作家のK氏などは、まだその頃は若かったのですが、三越で私の劇をやっているとき友人が彼を連れてきて私に紹介しました。K氏は当時東映のシナリオを書いていたらしいのですが、お茶に誘うと「昨日から何も食べていない。お茶なんかより何か食わせてくれないか。」と言うのです。天井を御馳走したら実にうまそうに食べていました。これは私にとって衝撃でした。プロでも仕事が無くなると食べることも出来なくなる。作家の道に専念することは大変な覚悟がいると思いました。そのうち私は同じ職場の先生と結婚し家庭を持ちましたが、その頃の私は月給はほとんど家に入れることなく、芝居仲間との付き合いで消えてしまいました。つまり妻に食わせてもらっている状態でした。当時の私を黙って食わせてくれた妻にも感謝しなければなりません。



児童劇作家協会賞を得て、
劇作活動に精進している頃
(昭和29年、1954年)

黒川 正に山内一豊の妻ですね。羨ましいでね。でもそれも奥様が先生の才能を信じていたからでしょう。

小川 その後、教育の場で責任ある立場となって行って、20年間くらいは自分で脚本を書いたり、祖師ヶ谷のゼミに出たりは出来なくなり、演劇の世界とは疎遠になりました。

相吉 でも先生は道德の指導主事をなさっており、NHKの道德番組作成などに従事されたのでしょうか。

小川 NHK の道徳番組が始まる時に、私に劇の作品を見たいと言ってきたのです。私は自分の作品をいくつか持って行って、面接を受けました。それらの作品を見た NHK から、道徳番組の脚本を書いてくれと言われました。この番組は昭和 36 年から 47 年まで約 11 年間、小学校向けは低・中・高学年別にテレビで、中学校はラジオで放送されました。初期の NHK 道徳番組は筒井敬介や井上ひさしなどが参加しており、そこに私も加わり中



その頃書いた NHK 道徳番組の脚本

学年を担当しました。この 11 年間は楽しさもありましたが、私にとっては大変な時代でした。道徳の指導主事をやっていたので、役所の仕事をして現場周りもする。現場の授業を見て、一生懸命勉強する。問題を解明していく。そして昼間の仕事が終わると、普通のドラマと違う、道徳の教材としてのドラマをどう作るか考え始めるのです。私以外はみんな専門の劇作家ですから、教育現場を全く知りません。私はなまじっか現場を知っているのです、変なものを書く訳にはいかないのです。

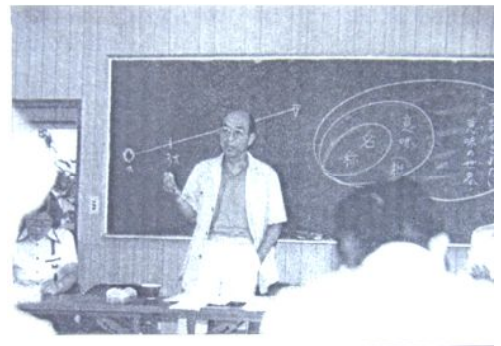


私は近くの家の屋根裏部屋を借りて、家に帰らずそこで原稿を書きました。家には二人の子供がいて、帰れば遊んでやらなければならない。だから帰れないのです。妻が飯を運んでくれたりして仕事をしました。従ってこの頃は、遊ぶ時間などは全くありませんでした。

相吉 先生は道徳の本もお書きになっておられますね。

小川 NHK の道徳番組の脚本は、『教育放送 75 年の軌跡』という本の中に、「テレビ道徳番組の初期」として入っています。

今お話したように、教育の仕事と劇脚本の執筆という二つのことをやったために、大変ではありましたが、今振り返ってそれで良かったのだと思います。教育の仕事に踏みとどまり一生懸命にやったことが、退職後に玉川大学に招かれて講座を担当するかたわら、いろいろな教育の専門書を書き続ける基盤になっています。玉川大学出版部から出してもらった 4 部作が大いに売れて、今もたくさんの人に読まれています。こういう本が書けたということは、教育の世界で頑張りながら、一方で演劇の仕事をするという二足のワラジをはきこなすという道を選んだからでしょう。



玉川大学のゼミで指導中の小川さん(1980 頃)

それにしても、ここまで遥々と良く来たものと思います。

黒川 本日はお忙しい中を長時間にわたってお話をお聞かせ下さり、ありがとうございました。今日伺ったお話の中で、小川先生の故郷の津久井の村のこと、県立厚木

中学のこと、更には戦時中に志願された甲種予科練のことなど興味のある話題が
いっぱい有ったのですが、スペースの関係で残念ながら取り上げることが出来ま
せんでした。また小川先生が現在取り組んでおられる「川崎市民劇」についても、
お聞きする時間が有りませんでした。それらの内容も、皆さんにいつかはご紹介
する機会が有れば良いなと思っております。では、本日の鼎談は
これで終わりいたします。



あとがき (H.27.7.21)

人は、その生まれた故郷の風土と家族との繋がりによって人間となる。その意
味で小川信夫さんの故郷津久井のこと、ご家族のこと、更には青春前期の県立厚木中学時代にあつ
たいろいろなエピソードなどを載せる紙面の余裕が無かったことは、実に残念である。小川先生ご
自身の口から、これらのことをたくさん語って頂いたのだが。いつかこれらのことをお伝えする機
会があれば良いと思います。

川崎郷土・市民劇について

小川信夫さんが最近 10 年ほど情熱を注いでおられる「川崎郷土・市民劇」について、話し合い
の中で取り上げることが出来ませんでしたので、以下に簡単にご紹介いたします。

川崎郷土・市民劇とは川崎の歴史や歴史上の人物を採りあげた創作劇を上演することで市民文化
の向上を図り、あわせて町づくりを推進するという目的を掲げて 9 年前に始まった企画です。2 年
ごとに上演しており今回は 5 回目で、脚本は全て小川さんの執筆です。

第 1 回 (2006 年)

多摩川に虹をかけた男
＝田中兵庫物語＝



第 2 回 (2008 年)

池上幸豊とその妻



第 3 回 (2011 年)

枳形城 落日の舞い



第 4 回 (2013 年)

大いなる家族—戦後川崎物語



第 5 回 (2015 年) 華やかな散歩

川崎が生んだ詩人佐藤惣之助の苦悩と反骨の半生

公演当日の会場・H.27.5.24

(川崎市教育文化会館)